

南山短期大学人間関係科での Tグループ合宿の動向

星 野 欣 生（南山短期大学教授）

南山短期大学人間関係科では、1973年に創立されて以来、Tグループをメインにした合宿による授業（以下Tグループ合宿という）がつづけられてきた。同科の特色の一つである。南山短大人間関係研究センター研究紀要「人間関係」創刊号（1984年発行）に、1984年、第11期生までのTグループ合宿の概要が、紹介されているが、ここでは、その後の動向について述べる。

それ迄と比べて、大きく変化したことは、Tグループ合宿が選択制になったことである。学生が自分の意思で、Tグループに参加することを、学習の前提としたものである。“強いられた体験”としないが為である。

1 Tグループ合宿のねらいについて

⑫^{※1} 12期生：今、ここでのかかわりを通して、人間関係を学ぶ。

⑬^{※2} 12期生：より深いかかわりを求めて“今ここ”に生きる

13期生 ことによって

直接体験として さまざまな人間関係

（対話、影響関係、対決、受容、信頼……）

を学ぶ

⑭ 13期生：より深いかかわりを求め

14期生 “今ここ”に生きることによって

さまざまな人間関係（対話、対決、

受容、信頼、影響関係……）を直接

体験して学ぶ

⑮ 14期生：⑭と同じ

15期生

⑩ 15期生：④に同じ

16期生

⑪^{※3} 16期生：「“今ここ”で人とかかわる」

17期生 ・ “今ここ”で起こっていることに直面する

- ・ わたしがわたしでいること、考え感じたことを大事にする
- ・ わたしを他の人に伝える
- ・ 他人をうけとめる
- ・ 他人とともにいる

⑫ 16期生：⑪に同じ

17期生

※1 ここでは、前掲記録（「人間関係」創刊号69ページ）の同一部分とつながり意味で、⑫から始める。

※2 ⑬から二つの期生が、並列されているのは、二つの学年が、選択により、一諸に参加するようになったからである。

※3 ⑰は6月、清里で、⑱は11月、御岳で実施されたものである。

これらは、前にも述べたように、それぞれのTグループ合宿のスタッフ（学外のトレーナーと学内の専任教員で構成）が、その都度、合議して作成し、学宿第1日目の導入のセッションで、学生に提示されたものである。いつも、学生個人のもっているねらいと、すりあわせる作業が提示の前後にある。

これらのねらいを概観してみても、特徴的なことは、「“今ここ”に生きる」という言葉が共通してみえることである。第一期生の時（16年前）のねらいが、「今ここに生きる」となっていること、その後のねらいの中に「深いかかわりを求めて」という言葉が、いつもあることを思えば、ちょうど、その両者がドッキングしたように思える。これらは、いつも、その時の学生ニーズ、状況に応じて、スタッフミーティングで、決められているものだけに興味深いものがある。また、直接体験する、直面するという言葉がでてきているが、ものごとを回避する傾向が強くなっている現代の学生（若者）の状況が反映されたものともいえる。①から⑱を通してみると、共通した言葉として、「今ここに」「生きる」「深いかかわり」「体験」といった言葉が、共通してみえるのも、この合宿学習の特徴を示しているといえよう。

2 Tグループ合宿の実施時期について

⑫が、1年次の10月、⑬からは、毎年11月に実施しており、学生は、その年次（学年）に関係なく、選択して、参加している。従って、参加する学生は、1年次、2年次とTグループの未経験者、経験者という4種の者が混在していることになる。そのことは、一般的にあって、学習を促進し、深めているよう

に思える。

3 スタッフ構成とその役割について

大筋において、スタッフの構成と役割については、第4期生の時に決められたものを、そのまま引き継いできている。簡単に説明すると、トレーナーは、学外から招聘し、各1名のトレーナーと教員がスタッフとして、グループには入っている。教員は、トレーナーではなく、教員として、どちらかといえば、メンバーに近い役割をとっている。また、トレーナーも、初期の頃からは、随分変化しており、最近では、人間関係科を中心に養成された人が多くなってきている。そして、この合宿の場が、トレーナー養成の場ともなっている。

4 プログラムについて

プログラムは、Tグループを中心にしてすすめられているが、全体会、自由時間、夜のつどい（毎晩）をあわせて構成されている。全体を通してしてみると、Tグループは14～16回、全体会が5～6回、自由時間が3～4回となっている。言うまでもないことであるが、これらは、結果としてよく似ているのであって、毎回、翌日のプログラムは、前夜にスタッフがミーティングをして決めている。全体の傾向が類似している、ということは、トレーニングの枠組みがおおよそ決まってきたと考えられるので、合宿のオリエンテーションの時に、プログラムの大枠を事前提示されてもよいのではないかという意見も表にでてきている。参加者に余計な不安をいだかせないことと、それぞれなりに、合宿の行動計画、見通しを持たたほうが学習にとって効果的であると思われるからである。その時も、あらかじめ、プログラムに変更がありうることを伝えておくことと、スタッフミーティングは、毎日開かれねばならないのは勿論である。

5 事前学習と事後学習について

(1) 事前学習について

これまでと同様、合宿の1週間前に、学内でオリエンテーションをしている。その時の学生の状況によって、さまざまな工夫がなされている。事前にデマのに流された情報から、学生に不安感が強い場合、その時の学生の気持ちなどをメモさせて（無記名）、それをオープンにしなが、Tグループの意味などを簡単に説明したこともある。一般的にいて、Tグループ合宿の概要と心構えのようなことを話すことが多いようである。

(2) 事後学習について

合宿終了後、1週間たった頃、学内で、実施している。11期生の頃は、グループの歴史づくりを、時間をかけてしていたが、最近は、合宿の場で、全体会のかたちで、かなりの時間をかけて、グループの流れを迫いながら、そこで起こっていたこと、その時の自分や他者の動き、グループの変化などを、トレーナーとともに、話し合い、ふりかえるようにしている。データを、丹念に拾っていくためには、体験直後が望ましいし、学外からみえているトレーナーとわかちあいをできることが、より必要と考えられるようになったからである。実際にやってみて、その方が効果的であるようである。従って、学内での事後学習では、Tグループに関して、その歴史、概念、社会的意味などについて、講義することが多い。その後、学生には、体験を中心にしたレポートの提出を求めている。

6 最近の状況について

人間関係科は、1989年に全面的なカリキュラムの改訂を行なったが、それにもなつて、合宿形式の授業についても変更があった。従来、合宿形式の授業は、「総合実習」とよばれていたが、今回の改訂から、「人間関係トレーニング

これまでのTグループ合宿の概要

回	期 生	合宿 日数	合宿の場所	学 生 数	グ ル ー プ 数	回 数			ス タ ッ フ	
						Tグル ー プ 回	全体 会 回	自由 時 間 回	学 外 ト レ ー ナ ー 人	学 内 教 員 人
⑫	12	5泊 6日	池の浦ビラ (鳥羽)	81 (人)	9	15	6	3	8	10+ob1
⑬	12・13	同上	御岳名古屋 市民休暇村 (木曾福島)	57 (14)	6	14	6	4	6	5
⑭	13・14	同上	同上	69 (44)	10	15	6	4	10	6+ob1
⑮	14・15	同上	同上	75 (10)	7	15	5	3	7	9+ob1
⑯	15・16	同上	同上	84 (27)	9	15	5	3	9	8
⑰	16・17	6月 同上	清泉寮 (清里)	62 (30)	6	16	5	4	6	6
⑱	16・17	11月 同上	御岳名古屋 市民休暇村 (木曾福島)	61 (11)	6	14	6	3	6	7

() 内数は2年生

ob はオブザーバー

グ」とよばれるようになった。そして、毎年、6月と11月に実施され、それぞれの中に、“Tグループ”と“ワークショップ”のコースがある。学生は、その2つから選択することになる。特にTグループは、必修とされ、学生は、卒業までの2年間の間に、4回あるTグループの合宿から、自分が希望する時に、選択して参加することになる。当初、全員必修だったが、自由選択となり、今また、時期を選択できる形で、必修となったものである。人間関係科の科目の中で、Tグループは欠かすことのできないものの1つと、明確に位置付けされたといえる。それでも、Tグループは、基本的に、自由選択であるべきという意見は、そのまま残っていることを付記しておきたい。

